

植物と人間:南アジアの園芸に関わる諸カースト巡り⑤

テーリー(油搾りカースト)と現代食用油事情  
—インド・ビハール州ガヤー県のナタネ油を中心に—

大橋 正明

Plants and People:  
Horticulture Related Castes in South Asia No. 5  
—“Teli”, an Oil Presser Caste, and the Current Edible Oil  
Situation in Gaya District of Bihar State, India —

OHASHI, Masaaki

はじめに

今回は園芸に関係するカーストとして、油料作物から食用油を搾ることを伝統的な生業としてきたテーリーを取り上げて調査を行った。

本論はまずインドの食用油の事情を概観し、次に北インドのビハール州ガヤー県のブッダガヤーという小さな町で、人々はどの食用油をどのように入手しているかを観察する。続いて油搾りのテーリー・カーストに注目し、ビハール州ガヤー県のテーリーの人々の人口、伝統的職業からの変遷や現在の生活状況、カースト組織と政治の関係等について言及する。

1. インドにおける食用油、健康、そしてカースト制

インドでは、食用油が味覚だけでなく、健康にも、カースト制度においても極めて重要な役割を持っている。

まず味覚において、油は極めて基本的な役割を果たしている。日本を含めた東及び東南アジアでは、うまみ成分は醤油や魚醤、味の素や鰹節などに代表される水溶性のものが大半だ。対照的に南アジアでは、玉ねぎやいくつか

のスパイスをしっかり炒めることで得られる油溶性の旨みである。

筆者が恵泉女学園大学に勤める前に五年間暮らしたバングラデシュでは、迎える客が大事であればあるほど料理に油を多く使うべし、と何度か助言された。確かにインド料理の本でクマールは、「ちょっと贅沢な料理に使うときには、油またはバターを少し多めに使います」と述べている<sup>1</sup>。ご馳走になる側にとっては胃が重くなる話だが、香ばしいナタネ油を惜しげなく使ったカレーや魚の揚げ物、炒めてから炊いたブリヤニという炊き込みご飯は、答えられない美味しさである。

さらに南アジアの人々の大半は、食用油を体に塗ることは健康によい、と考えている。北インドでは、このためにナタネ油を好んで使っている。特に幼児には、毎日油を全身に塗ると、毛髪を豊かにし、マッサージの刺激も加わるので骨や筋肉の成長にも良いと言う。また大人も、冬には沐浴の前に全身に塗ることが多い。こうするのは、肌が乾燥のせいで荒れるのを防ぐからで、また沐浴の前に塗るのは、沐浴後だと油が衣服を汚すからだという話だ。塗油後の沐浴では、石鹸を使わないとも言っていた。インド医学であるアーユルヴェーダでも、薬油による全身のオイルマッサージは重要な治療法である。

さらにインドや南アジアに多いヒンドゥー教徒は、食物が穢れのもとになると考え、いろいろな制限を設けている。今日ではあまり見られないが、高いカーストの人が肉食することや低いカーストの人から食物を受け取ることを避けるのも、その制限の例である。しかし後者の場合、高温の油で揚げた食物はパッカー<sup>2</sup>カーナー(食物)と呼ばれ、浄性が高いとされるために、この制限が緩和される。例えば小型のチャパティを油で揚げたプーリーは、小麦を練って焼いたチャパティやナンより浄性が高いことから、様々なカーストの人が入り混じる駅頭で旅人向けによく売られている。

## 2. ガヤー県の食用油事情

### 2-1. 家庭の食用油

面積がヨーロッパに筆頭するほど広大なインドでは、当然ながら地域によって一般的に使われる食用油が異なる。一般にベンガル湾から西に遡っ

たガンジス川流域の北インドではナタネ油が、南インドの海沿いやスリランカではココナツ油が、そして南インドではベニバナ油やゴマ油が一般的だ。また牛乳から精製したギー油は、最高級の食用油であると同時に、ヒンドゥー教や仏教の儀礼の灯明などのための清浄な油として、南アジアでは広く大切にされている。ちなみにこのギー油、ビハール州ではヤーダブという牛飼いかーストの人たちが、自分たちで絞ったミルクから作るのが伝統的だ。

ところでこうした油は地元産や国内産が多いが、最近では輸入された安価なダイズ油も浸透している。ブッダガヤーのバザールの雑貨屋<sup>3</sup>で尋ねたところ、販売する油の6割がナタネ油で、2割がダイズ油、残りがベニバナ油とパーム油とのことだ。このうちダイズ油とパーム油が、大手業者によって輸入・加工・流通される代表的な食用油である。人口でインドは中国に次ぐ第二位で世界人口の17.5%を占める<sup>4</sup>が、世界第四位の食用油の消費国である。この食用油の半分程度は輸入に頼っており、その量は中国を抜いて世界一である<sup>5</sup>。

北インドからバングラデシュにかけてのガンジス平原一帯では、冬になると稲を刈り取った後一面に、ナタネを栽培する<sup>6</sup>。緑の少ない冬の北インドで、写真のように一面どこまでも咲き誇る黄色の菜の花は、実に印象的な美しい風景を提供してくれる。

ブッダガヤー<sup>7</sup>のような農地に囲まれた北インドの小さな町では、家庭の多くが農地を保有するか農家を親戚に持っており、そのため多くがナタネの種を保有している。その家庭で食用油が必要になると、ナタネの種を適量袋に入れ、空き瓶と一緒に油搾りの店に持って行って、手数料を払って油を絞って瓶に入れてもらう。10Kg当たりのナタネの搾油手数料は、電気を使っている店が15ルピー(30円)、燃料費が高いディーゼルの店が28ルピー(56円)であった。10キロのナタネから、後述する品種にもよるが、おおよそ3~6キロのナタネ油と、4~7キロの搾り滓が得られる。このナタネ油の小売値段は1kg当た



写真1:UP州アラーハーバード市近郊の農村一面に咲くナタネ  
(11年2月大竹薫撮影)

りおおよそ70ルピー(140円)、搾り粕は1kg当たり13ルピー(26円)であった。この搾り滓は家畜の飼料となるので、多くがこれを持ち帰る。

こうした家庭では、このように搾りたてのナタネ油をあらゆる料理に使用している。不足する分や、農家や農業に関わらない家庭では、濾過されガラスやプラスチックの容器に封入されたナタネ油を購入している。封入されたナタネ油には、地元のガヤー県産のもの<sup>8</sup>もあるが、インドのナタネの多くが生産される西部のラジャスターン州産のものも多い。こうしたものには、混ぜ物がしてある可能性がある、と消費者は語っていた。

## 2-2. 業務用の食用油

北インドの街角や食堂、駅のプラットホームなどでは、油で揚げた先述のプーリーや豆と野菜の天ぷらのバコウラーなどが良く売られている。さらに最も安価でポピュラーな甘菓子ジュレビーや代表的スナックのサモーサーも、油で揚げて作る。つまりインドの外食では揚げ物が少なくなく、そのためには大量の油が不可欠だ。

ガヤー県のほとんどの大衆食堂で使われている油は、右の写真にあるようなプラスチックの大きな15キロ容器に詰められ、一つ800ルピー<sup>9</sup>程の価格



写真3:容器に入ったバナスパティ  
(10年11月、ガヤー県ブッダガヤー)



写真2:パン生地を油で揚げた  
スナック作り  
(10年11月ガヤー県ブッダガヤー)

の植物油バナスパティ<sup>10</sup>だった。価格は1キロ53ルピー(106円)程なので、先に述べたナタネ油より安い。この原材料はパーム油とゴマ油と表示されていたが、両者の割合は記載されていなかった。常温で固体だったことから、パーム油が主要な成分であると推定される。もちろん、より質の良いものが混ぜられている可能性もある。

本調査の現地のアシスタントは、この油は飲食店の揚げものだけに使われ、カレーには使わない、健康には良くない、と強調していた。これに対して関口は、「健康志向の広がり調理にはバナスパティを使う家庭も増えている」<sup>11</sup>と述べている。バナスパティが今後どうなるかは、インド人の健康意識によって変わってくるだろう。

### 3. ナタネの種類と生産

本論ではこれまでなたね油について述べてきたが、地元ではなたねを以下の3種類に分類している。

表-1:ガヤー県で生産されているカラシ菜の種類と特徴

現地の呼称	種の色・形状	搾油量	油価格	生産、その他
サルソーン	黄色、小丸	多い	高い	単作、高収穫品種(HYV)もあり。マスタード
トローラー	赤褐色、大丸	少ない	安い	小麦と混作か単作
ラーイー	赤褐色、小丸	少ない	安い	ダール豆と混作か単作

統計がないのでインタビューからの推定になるが、一番多く生産されているのが小麦と混作されるトローラー(*Brassica juncea*と推定)である。冬になると、青い小麦に混ざってなたねが育ち、黄色い花を咲かせる。なたねのほうがより背が高くなるので、小麦には良い影響を与えないし、収穫も面倒になるといふ。それでも窒素固定作用か脱落した葉の施肥作用のせいかな、地味は良くなるとのことだ。ガヤー県のある村での小麦とのトローラーの混作の場合、収量は1カター(150平米)から小麦40キロ、トローラー5キロ、とある農民が答えていた<sup>12</sup>。単作の場合、収量は1カター(150平米)当たり40kgほど<sup>13</sup>である。これに対していわゆるマスタードであるサルソーン(*Brassica campestris*のvar. *trilocularis*と推定)は、やはり単作で1カター当たり30kgしか収穫できないが、重量の50~60%が油となり、価格も高いので価値は高い。訪ねた農家では、種は自家採種か購入とのことだった。

面白いことに、加工・消費段階では、種の大きさは異なるが色は同様なトローラーとラーイーは必ずしも区別されていない。脚注7で言及したスジート・クマールの工場と販売店では、サルソーンとトローラーとだけ区別している、

とのことであつたし、実際多くの人がこの二種類だけに言及していた。今後工場加工・封入されたナタネ油が増えてくると、この二種類の区別も変わってくる可能性があるだろう。



写真4:サルスーン(マスタード)の種



写真5: トーラーの種

#### 4. 油絞りカースト、テーリーについて

##### 4-1. テーリーの概観

まずテーリー(Teli) というカーストを、シンに従って概観しよう。このカーストは、伝統的にナタネや胡麻から油(ヒンディー語でテール=Tel)を絞ることを職業にしてきた。食用油はあらゆる人間の生活やヒンドゥー教の儀式に必要なものなので、様々な階層集団にこの仕事をする人がいたのが統合された、という説もある。このカーストは北インドの広い範囲に居住している。このテーリー内にいくつかのサブカーストが存在するし、イスラーム教徒にも、同様なグループが存在する(Singh:p.3462-3465)。しかし今回の調査では、こうしたサブカーストなどに関する詳細な情報を得ることは出来なかつたので、本論ではこのことについては限定的にしか言及しない。



写真6:ビハール州油サーフ協会  
(10年11月ガヤー県ガヤ市)

この人たちはプラサードやサーオ、身分の高い人が多いグプターなどいくつかの異なった苗字を使っているが、調査地で見える限り最も一般的なのは

サーフ (Sahu)<sup>14</sup>であった<sup>15</sup>。それを示すのは、ビハール州の州都パトナーにあるこのカーストの人々の組織の、「ビハール州油サーフ協会 (Bihar Pradesh Tailik Sahu Sabha)」という名称だ。なおガヤーの市内には同名の県支部があり、宿泊室付きの大きな結婚パーティー会場を所有している。テーリー・カーストの多くは肉食をし、男子だけが遺産を相続する。このせいもあって、娘に対する財産の生前贈与でもあるダウリーの習慣も一般的だ (Ali:p. 919)。

比較的最近と思われるある統計では、テーリーはビハール州の東隣のUP州に276万人、ビハール州には228万人となっている<sup>16</sup>。セワックによると、1931年の国勢調査でテーリーは、農業のクルミーや野菜つくりのコイリー、皮革加工のチャマルなどと並んでビハール州で最も人口の多い10番目のカーストであり、人口の2.8%を占めている (Sewak:p.246-247)。その後の人口増加や2000年のビハール州の二分割によって人口数は変化しているようだが、割合としては決して小さいカーストであることは間違いない。

#### 4-2. 機械化を機に転身したテーリーの人々

以前テーリーは、コールフー (Kolphu) と呼ばれる牛に曳かせてグルグル回る大きな杵棒と臼の間で圧搾する器具を使って、種から油を搾っていた。20年ほど前までの南アジアでは、この器械を据えた油絞りの家がどの村のバザール近くにはあったものだ。ところが、その頃から、写真7にあるような電気がディーゼルで動く搾油機が次第に普及してきたために、今日ではコールフーを見ることはほとんどなくなってしまった。



写真7:大型の動力搾油機  
(10年11月、ガヤー県イトワーン)

動力搾油機では油絞りの速度や処理量が飛躍的に上昇したため、油絞りの手数料が安価になった。それまで伝統的なやり方でやっていた、そして動力搾油機を導入するだけの資本を持たなかったテーリーは収入が減り、次第にこの生業を放棄せざるを得なかった。

ガヤー県のモチィハーニー (Motihani) 村でテーリーの30歳位の青年は、そ

の間の事情を以下のように詳しく語ってくれた<sup>17</sup>。

自分の家では、10年前まで油絞りをしていた。その頃は、十日置きにナタネの種をガヤーの町で購入し、牛車で運んで絞って販売していた。深夜12時に村を牛車で出て、朝7時に27キロ離れたガヤーの町に到着し、昼までに仕入れを済ませ、夕方7時か8時に帰村した。この仕入れ値は、キロ4ルピー×100キロで400ルピー。これを絞って30キロの油がキロ10ルピーで300ルピー、70キロの搾り滓がキロ5ルピーで350ルピーで合計650ルピーの総売り上げ。ここから仕入れ値を引くと、十日間で250ルピーの収入になった。

最近だと、100キロのナタネの種が2500ルピー、輸送料が100ルピーで、仕入れ合計が2600ルピー。30キロの油がキロ60ルピーで1800ルピー、70キロの搾り滓はキロ13ルピーで910ルピーなので、合計が2710ルピー。つまり110ルピーにしかならない。物価も高くなっているのだから、こんな手数料では食べていけない。

この村には2百世帯が暮らしていて、そのうち15世帯がテーリーで、昔はみんな村人のために油絞りをしていたが、今は一軒もやっていない。今は自家消費用に、市場でマスタード油を購入している。

今は自作兼小作の農業と、地元の市場で野菜や果物の商いで暮らしている。収入は前者が四分の一、後者が四分の三位。油絞りをしていたころより、収入は向上した。他の14世帯のテーリーは都市で勤めや商売をしており、自分より経済的にはよい。

近くのイトワーン (Itwaan) の小さな町で会った55歳位のテーリーのS.P.グプター<sup>18</sup>は、カースト組織(サーフ協会)の役員を務めている。彼によると、ここには以前25世帯のテーリーがいて皆油を搾っていたが、現在では本人を含めて3世帯だけがこの仕事を続けているだけで、あとは穀物や食用油などを商う商売人が多いということであった。油絞りだけでは収入が不十分ということで、このグプターは農村部に政府の配給物資を貧困者に販売する配給店を営んでいる。

なおガヤー市の「ガヤー県油サーフ協会」の幹部たちは、テーリーの10%は都市や町に住んで商売などに従事して豊かだが、90%は農村部に居住して様々な職業についていて貧しい、と訴えていた<sup>19</sup>。

これらの情報を総合すると、テーリーの多くは20年ほど前までは伝統的な油絞りを家庭内手工業的に行い、貧しいながらも安定していた生活を行っていた。ところがその後の動力機械の導入によってその大半が転職を余儀なくされ、一部の人たちはそれなりに成功を収めたが、多数の人たちの生活はそれほど改善していない、ということになる。資本集約的な機械の導入が、貧しい人にもたらす典型的なインパクトと言えよう。

#### 4-3. ヴァイシャなのか、シュードラでOBCなのか

この連載で毎回繰り返しているように、インドのヒンドゥー教徒の4種姓(ヴァルナ=色)と呼ばれるカーストは、上位から僧侶のバラモン、戦士のクシャトリア、商人のヴァイシャ、農民・職人などのシュードラの四つからなっている。そしてこれら四つの枠の下(あるいは5番目)に位置する旧不可触民からなっている。このうち上位3つは輪廻転生を繰り返す再生族と呼ばれ、その証に聖紐を体にかけている。そしてこれの下シュードラや枠外の旧不可触民は一生族と呼ばれ、様々な差別を受けてきた。

しかし日常的に重要なカーストはこのヴァルナではなく、これまでこのシリーズで取り上げてきた野菜カーストのコイリーや花カーストのマーリーのような、主にその伝統的職業によって分かれ、地域ごとに呼び名やヒエラルキー上の位置が異なるジャーティーと呼ばれる数千のカーストである。全てのジャーティーは、先の4ヴァルナと旧不可触民のどれかに属し、かつ地域ごとに序列付けされている。

テーリー・カーストは、バラモンから始まる4ヴァルナ(種姓)の3番目のヴァイシャという商人階級の一員である(Ali:p.919)。しかし面白いことに、ビハール州のテーリーは、この研究シリーズの前々回で取り上げたコイリー(野菜づくり)やクルミー、そして前回のマーリー(花卉関係)などヴァイシャよりヴァルナが一段低いシュードラに属する諸カーストと一緒に、指定カーストに準じて様々な優遇措置が得られるOBC(Other Backward Classes=

その他の後進諸階級) のリストに載っている。つまり、ヴァルナ的には上位から3番目だが、社会経済的には4番目の諸カーストと同じに位置づけられている。

ブッダガヤー在住のテーリーの中では出世頭である開業医のサーフも、自分たちはヴァイシャであると明快に語っていた<sup>20</sup>。一方テーリーの献身的な社会活動家の通称カーラーは、自分はシュードラである、だから聖紐もつけない、と主張していた。

これまで歴史的に、それぞれのカーストは自分のカーストランクを上昇させようとして、再婚や肉食、飲酒の禁止をはじめといたヒンドゥー的に浄性が高いことをそのメンバーに求めてきた。こうした動きはインド各地で観察され、インドの社会人類学者シュリーニヴァース(Srinivas)によってサンスクリタイゼーション(Sanskritization、あるいはサンスクリット化)と呼ばれた(山崎:p. 298)。この観点から見ると、テーリーがOBCのリストに含まれていることは、受け入れられないはずである。

ところが現実とはまったく逆である。ビハール州のOBCは、102のカーストや階層が掲載されている特権の多い第一リストと、37が載っている特権の少ない第二リストの二つがあり<sup>21</sup>、テーリーはその第二リストの12番目にある。ガヤー市で訪ねた「ガヤー県油サーフ協会」の幹部たちはこれに大変不満で、自分たちは貧しいと主張して、テーリーを第一リストに移すための運動を行っている。

同様な出来事は、今日のインドでは決して珍しくない。例えば2010年7月9日の朝日新聞は、ジャートと呼ばれる上から二番目のクシャトリアに属する農民が、自分たちが経済発展から取り残されている、それゆえOBCのリストに加えろと主張して水道の水門を実力占拠したことを報じている。さらに同年12月27日の同紙には、グジャールというOBCのジャーティー集団が、OBCに上位集団が増えすぎたとしてこれとは別枠の特権を要求して、鉄道や道路を占拠した、という記事が載っている。

これらの動きを総括すると、インドの一般の人々の生活において歴史的に人々の行動を規定してきたヒンドゥー教の宗教的価値を、就職や進学で恵まれるOBCの特権、つまり経済的価値が凌駕する状況にあると言えよう。

#### 4-4. BJP支持と教育の遅れなどにみられる保守的スタンス

テーリーの多くは、ヒンドゥー至上主義を掲げ上位カーストが支持基盤であるインド人民党（BJP）の支持者である。ガヤー県油サーフ協会の幹部によると、ガヤー県の最近の選挙ではテーリーの人が別な政党から立候補したが、80%のテーリーはその候補者よりBJPの候補者に投票したというのだから、筋金入りのBJP支持者である。

前述の通りテーリーはヴァイシャという商人階級の一員であり、与党国民会議派( kongress )の支持基盤である低カーストではないので、BJP支持であることは論理的だ。にもかかわらず、国民会議派が自らの票田として作ったともいわれるOBCに積極的に属していることは、この論理に少し矛盾する。

また数量データで裏付けることは出来ないが、テーリーは一般に教育にあまり力を入れないこと、そして先にも述べたように相続は男子だけが対象になることに示される男性優位の価値観が強いことも、本調査の中で他カーストの人々だけでなくテーリーの人々も認識していた。こうしたことを総合すると、テーリーの多くの政治的スタンスは、ヒンドゥー的価値観に基づいた伝統的保守であると言えよう。

#### 5. まとめ

インドでは、食用油が味覚に加えて、健康増進やカースト制度で嫌悪されている穢れを減少させるという重要な役割も持っている。

インドの面積は広大であるので、地域によって異なった食用油が用いられるが、本調査行われたガンジス川流域の北インドでは、ナタネ油が伝統的かつ最も一般的である。しかし近年では、輸入されるパーム油や大豆油が徐々に主役の座を占めるようになっていく。

伝統的な生業としてナタネから油を搾ってきたのが、テーリーと呼ばれるカーストの人々である。油は日常生活や宗教儀礼に常時不可欠なので、どの村にもテーリーがいて牛などに曳かせたシンプルな搾油機で油を搾っていた。しかし近年では、電気やディーゼルの動力搾油機が普及したために、テーリーの多くは伝統的生業から農業等に転じた。

こうして経済的困窮度を増したテーリーの多くの人々は、カースト序列の中では中位の商人階級のヴァイシャの一員であるにもかかわらず、就職や進学で特権がある、ヴァイシャより一段低いシュードラ・カーストの人たちが多いOBCのリストにあり、しかも同じOBCでもさらに特権の多いリストへの移動を求めている<sup>22</sup>。つまり昨今のインドでは、宗教的価値観より経済的価値観が優位を占めるようになっている。

また現在の一人一票制の代議制民主主義においては、カーストは選挙において頼りになる票田という役割を果たしている。換言すると、カーストが一致団結し、統一した政治活動や投票行動を行うことで、そのカースト集団の主張や要求が官僚や議員に伝わることになる。伝統的な油絞りの生業に携わる者は今や少数となり、大半は農業や商業に従事しているテーリー・カーストも、サブカーストなどの内部の区分や差異を縮小させる一方、一つのカーストとしての枠組みでの結束をより堅固にしている。

インドではITを軸に力強い経済成長が続いているが、テーリーを見る限り、インドのカースト制度は今日の急速な社会経済変化に柔軟に対応し形を変えながらも、強固に存在し続けている。

## 出典および主要な参考文献

渡辺玲、誰も知らないインド料理、出帆新社、1997

藤井毅、カースト、辛島昇監修、「南アジアを知る事典」(初版)所収、平凡社、1992

山崎元一、サンسكريット化、辛島昇監修、前掲書

Singh, K.S., India's Communities Vol. VI, OXFORD Univ. Press, Delhi, 1998

Ali, Hasan, The Teli, in "People of India Bihar" edited by Singh, K.S, Calcutta, 2008

Sewak, Ram, History of Bihar Between the Two World War, 1919-1939, Stosius Inc/Advent Books Division, 1985

ウィキペディア英語版のTeli, <http://en.wikipedia.org/wiki/Teli>, 2011年3月21日他閲覧

ルーラル電子図書館, <http://lib.ruralnet.or.jp/libnews/nishio/nishio129.htm>, 2011年3月20日検索

Edible oils market in India, <http://www.indiaonestop.com/edibleoils.htm>, 2011年3月13日

## 検索

- 1 クマール、ニティ (Kumar, Niti)、ニティの誰でもできるインドの家庭料理、星雲社、東京、2002
- 2 ヒンディー語の「熟した、完成した、石作りの、正規の」などを意味する形容詞。
- 3 ブッダガヤーの北を流れる川に並行する狭い道のバザールにある食品雑貨店で、所有・経営者のスバーシュ (Subash) への、2010年11月19日のインタビューより。
- 4 人口は2007年。出典は国連開発計画、人間開発報告書2009、阪急コミュニケーションズ、2010年
- 5 出典は、以下のDAINIK Bhaskar紙HP版。2011年3月13日閲覧[http://business.bhaskar.com/article/091117001534\\_now\\_india\\_50\\_percent\\_imported\\_veg\\_oil\\_dependent.html](http://business.bhaskar.com/article/091117001534_now_india_50_percent_imported_veg_oil_dependent.html)
- 6 信金中央金庫総合研究所によると、日本のナタネ耕作は1957年にピークで25.9万haだったが、その後大豆の輸入自由化などの影響で減少し、2001年の耕作面積は僅か301haとなっている。出典は、<http://www.scbri.jp/PDFsangyo/scbri> (2011年7月18日閲覧)
- 7 インド北部の最貧州と知られるビハール州の南部に位置するガヤー県に位置する小さな町。ブッダ正覚の聖地であり、世界中から多くの巡礼者が訪れる。
- 8 ガヤー県には、ナタネ油を地元へ供給する小規模な油搾り工場が多数ある。ブッダガヤーでは、町近くのファルゲー川(仏典では尼連禪川) 岸のマハント城の一角に、テーリー・カーストのスジート・クマールが経営する芥子菜の油搾り工場があり、最大稼働で一日600kgほどの油を搾油・濾過し、ガヤー市で搾り滓とともに販売している。
- 9 800ルピー .は1600円。正確な価格は不明だが、800ルピー .とすると1キロ当たりの油の価格は53ルピー . = 106円。
- 10 最も知られたブランド名はダールダーで、この植物油の代名詞にもなっている。
- 11 関口真理、「インド料理はスパイスと油」、[http://woman.excite.co.jp/beauty/cosme/world/india\\_041.html](http://woman.excite.co.jp/beauty/cosme/world/india_041.html)、2010年11月19日閲覧
- 12 換算すると小麦が反収267キロ、ナタネが33キロとなる。日本では小麦単作の

反収は320キロ程度なので、それほど遜色のない水準である。

- 13 換算すると反収267kgで、日本の水準かそれ以上の高い収穫量である。
- 14 サーフは、ヒンディー語で「金貸し、商人」を意味する。
- 15 ウィキペディア英語版のTeliの項に掲載されたテーリーの著名人24人中圧倒的多数の10人が、サーフを苗字にしていた。
- 16 キリスト教の布教目的と思われるJoshua ProjectのHPより。調査年は不明。信頼性は確認の方法がない。<http://www.joshuaproject.net/people-profile.php?peo3=18229&rog3=IN>。閲覧2010年11月14日
- 17 ラームプリット・クマール・グプターには、2010年11月16日午後3時半から一時間、居宅でインタビュー。
- 18 シンバーラク・プラサード・グプターには、本人の店近くで2010年10月16日夕方インタビューした。
- 19 ガヤー県油サーフ協会は、2010年10月16日午前中に訪問してインタビューした。
- 20 シュリークリシュナー・サーフ医師には2010年11月15日夕方、ブッダガヤーの医院でインタビュー。
- 21 第一リストには112番までであるが、このうち10が削除され、第二リストには44番までであるがやはり7つが削除されている。
- 22 ヒन्दウー教におけるヴァイシャヤやシュードラといった四種姓のカーストと、社会経済的状態が悪いジャーティーのカーストなどの諸集団のうち特に社会経済状態が悪いと政府が指定するOBC(他の後進諸階級)では、元々の意味が異なるが、かつてOBCにはシュードラの人が多かった。